

青丘文庫研究会 月報

No.292

2018年9月1日

青丘文庫研究会 〒657-0064 神戸市灘区山田町 3-1-1 (公財)神戸学生青年センター内

TEL 078-851-2760 FAX 078-821-5878 <http://ksyc.jp/sb/> e-mail hida@ksyc.jp

①在日朝鮮人運動史研究会関西支部 (代表・飛田雄一)

②朝鮮近現代史研究会 (代表・水野直樹)

郵便振替<00970-0-68837 青丘文庫月報>年間購読料 3000 円

※ 他に、青丘文庫に寄付する図書の購入費として 2000 円/年をお願いします。

※2018.7.1 発行の月報は290号としていましたが、292号のまちがいでした。

<巻頭エッセイ>

小鹿島 姜善奉詩集との出会い——翻訳・出版に向けて——

川口祥子



泥まみれの梅檀(せんだん)の実を飴玉(あめだま)に
腐った豆の香ばしさに盗み食いし
罰で北風すさぶ雪庭で両手をあげて立たされ 眠
りに勝てず
目が覚めると凍傷にかかっていた。

その姿を見た母は
張り裂ける胸を抱いていつまでも哭(な)き叫ぶ。

愁嘆場(スタンジャン)

母の胸から引き離された子ら
上級生と教師の 暴力と脅しに
骨身に刻み込まれる傷跡
こらえた涙は小さな水溜まりとなり
身を振(よじり) 母の乳首を探し求める。

時が限られた母と子の出会い

「ひもじいだろうね……」 問う母の言葉に
言っではいけない教えを忘れ
思わず言った「うん」のひとこと
咎(とが)として食らった山盛りの汁飯で死線をさまよう

小鹿島に住む詩人・姜善奉さんの詩である。1939年生れの詩人は 1946 年、釜山から小鹿島に送られるハンセン病の母親の手を握りしめてはじめてこの島に来了。間もなく「未感染児童」として母親から引き離されて島内の保育園に收容され、月に一回、道を隔てて目を合わせることしかできなくなった。この詩は 2017 年 1 月、青丘文庫研究会のメンバーである三宅美千子さんの依頼を受けて日本語に訳したものである。ハンセン病問題に深く関わっておられる三宅さんは、ある集会で話をする時の資料として用いたいとのことであった。しかしハンセン病に関する知識に乏しかった私は、詩一篇を訳すにもその背景を把握する必要があるので、その詩が収められている詩集『곡산의 솔바람 소리(谷山の松風

の音』と、自伝『소록도, 천국으로의 여행(小鹿島、賤国への旅)』を借りて読んだ。そこには幼年期の母子離別とその後の発病、母上の愛情と著者の深い信仰、小鹿島医学講習所での競争と勉学、島からの脱出と困難な社会復帰など、姜善奉氏の壮絶な人生が記されていた。

さらに小鹿島と日本の植民地支配についても多くのことを考えさせられた。姜善奉氏の父上は日帝時代に小鹿島から脱出し、強制労働によって痛めた体で放浪しながら母上と出会い、一人息子を得ながらも行き倒れて逝去された。姜善奉氏が小鹿島に入ったのは解放後であるが、当時の島での生活は日帝時代の制度をそのまま受け継いだ苛酷なものであった。以前から島で暮らしていた先輩患者たちと同じ部屋で過ごしながら多くの話を聞くうちに、氏は解放前のことを記し残しておくことも自らの使命と受けとめ、日帝時代の島の様子についても詠っている。

読んでいくうちに小鹿島そのものを知りたくなり、その年 3 月に友人と訪れた。姜善奉氏はバスの終点である鹿洞までご自分の車で迎えに来て下さり、国立ハンセン病博物館を見学した。その後、外部の人間が入れない区域にある碑や建築物など島内を車で案内して下さった。最後に氏のお宅で奥様とともにお茶をご馳走して下さり、前記二冊とその後に書かれた『곡산의 인동초 사랑(谷山の忍冬草の愛)』を頂戴した。これまで何人かの日本人に本を贈呈したが、まだ日本では紹介されるに至っていないとのことであった。

帰国するやいなやこの詩集を日本語に翻訳して多くの人に知ってもらいたいという思いがこみあげてきた。著者から翻訳の許しは得たものの、私は詩を読むのは好きであるが自ら詩を書いたこともなければ翻訳の経験もない。幸いにも詩人の上野都さんに監修をお願いしたところ快く引き受けて下さったので、日本語版を世に出す自信が持てた。上野さんはあくまでも私の考えを尊重しながら、詩

人としての細かい助言をくださった。翻訳する過程と、日本での理解を深めるための註と解説を記す作業は悩みながらも充実した時間であった。さらにこの度ハンセン病問題の優れた本を出している解放出版社から『小鹿島の松風』(仮題)として刊行できることになったのは望外の喜びである。年末には刊行予定であるので、姜善奉さんの詩に多くの方々が出会ってくださることを切に願っている。

現在日本ではハンセン病元患者家族の人たちによる国家賠償請求訴訟が進行中である。この訴訟は 2001 年に勝訴したハンセン病違憲国賠訴訟とともに国の責任を糾明するものであるが、同時に社会の偏見と差別、無関心をも問うものといえる。これほど苛酷な人権侵害が長年続いていたにも関わらず、ずっと無関心であった自らが恥ずかしい。遅まきながらも今後関心を持ち続けたいと思っている。あと 2 篇の詩を紹介したい。

小舟

老松の皮で
帆掛け舟を作る
昨夜の風雨が吹き付け
ぬかるんだ松林の中の窪地
水が溜まったので
帆掛け舟を浮かべると
風をはらんで走る
胸のわだかまりを解きながら
この舟に乗れば
抑圧、蔑視、冷遇、拘束のない
土地に行けるだろうに
だが
この舟には
ゴム靴片方も載せられないものを。

夢の話

昨夜 音もなく小雨は降り
隣家の年寄りたちと話に花

金さんの夢の話
夢の中で駆けっこをするんだが
一等になり賞をもらったと

ひょいひょいと踊り
上気した顔で喜びをかみしめる
下肢を切断した金さん、

横に座った梁さん
桃の花が真っ盛りの故郷の裏山で
愛するスニと固く抱き合ったとか
ふわりふわりと踊る
目の見えない盲人

聞いてみれば 他愛のない夢
それでも夢は夢だと 膝を打ち 笑う彼ら
純朴な魂は 話の間合いを埋めようと
一杯の茶に 濃い情愛を淹れて飲む。

●青丘文庫研究会のご案内●

<※前回、7月8日の研究会は気象条件により延期しました。>

■第394回在日朝鮮人史運動史研究会関西部会

2018年7月8日(日) 午後2時～3時半

「もうひとつの軍事法廷—沖縄・南朝鮮・日本本土

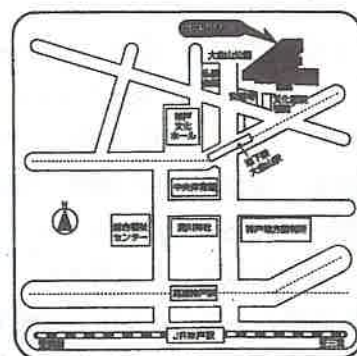
小野潤子

■第317回朝鮮近現代史研究会

2018年7月8日(日) 午後3時半～5時

「朝鮮通信使の竹林寺と王仁博士の遺跡」 姜健榮

※会場 青丘文庫(神戸市立中央図書館内、TEL 078-371-3351、新館3階で身分を証明するものだして入館証を受け取り4階会議室にお越しください。)



【今後の研究会の予定】

<10月14日(日) 午後2時、参加費 1500 円>

会場：神戸映画資料館 <http://kobe-eiga.net/>

神戸市長田区腕塚町5丁目5番1 アスタくにつか1番館北棟2F 201

※国道2号線(または高速高架)と大正筋商店街(たいしょうすじ しょうてんがい)の交差点角にあるエスカレーターで2Fへお越しください。※同ビル3Fの中華料理「神戸飯店(こうべはんでん)」さんが目印です

金稔万さんのレポート 「NDU から NDS へ」

布川徹郎ら NDU(日本ドキュメンタリスト・ユニオン)のスタッフが竹中労の企画により1971年に韓国ロケした映画『倭奴(イエノム)へ 在韓被爆者・無告の二十六年』と、NDS(中崎町ドキュメンタリースペース)の金稔万が釜ヶ崎に密着して描いた『釜の住民票を返せ! 2011』を上映し、布川徹郎から信頼されていたと共に活動した金稔万がその後の状況を含めて報告。その他、参考上映も企画。なお、この上映会はどなたでも参加できるが、「青丘文庫研究会」の例会としても位置づけられています。1970年代から有名だった須磨の「青丘文庫」は神戸長田のケミカル産業に従事していた韓哲嘆(ハン・ソッキ)さんが朝鮮史関

係文献を集め開設したもので、1997年に神戸市立中央図書館内に再オープンし、今も連綿と「青丘文庫研究会」が毎月開かれている。

『倭奴(イエノム)へ 在韓被爆者・無告の二十六年』To the Japs: South Korean A-Bomb Survivors Speak Out
日本/1971/日本語/カラー/16mm/52分

スタッフ：井出情報、井上修、斎藤隣、布川徹郎

企画：竹中芳

製作委員会：「倭奴へ」製作推進委員会

1971年、佐藤栄作首相が朴正熙(パク・チョンヒ)大統領の祝賀パーティ列席のために訪韓した時を得て、在韓被爆者8名は直訴状を持って日本大使館に向かった。在韓被爆者は韓国官憲によって佐藤首相の韓国滞在中拘束される。カメラはその8人の生活を追う。この1971年は、被爆者・孫振斗(ソン・ジンドウ)さんが、日本への密航により収監された大村収容所から、在留と医療を求める“原爆手帳裁判”を闘い始めた年である。山形国際ドキュメンタリー映画祭2005の在日映画の特集「日本に生きるということ」で上映するため新たに作成したプリントを上映。

『釜の住民票を返せ!』 Give Back Kama's Rights!

日本/2011/日本語/カラー/Blu-ray (SD) /50分

監督、編集：NDS 金稔万(キム・イムマン)

撮影：金稔万、布川徹郎、佐藤零郎、中村葉子、梶井洋志、小田切瑞穂、川瀬俊治

製作：NDS(中崎町ドキュメンタリースペース)

大阪市西成区、日本最大のドヤ街であり寄せ場である、日雇い労働者が多く暮らす通称釜ヶ崎。ここにある5階建の小さなビルに、労働者や野宿者など約3,300人の住民票が登録されていた。市当局は、居住実態がないことを理由に、彼らの住民票を削除することを決定。そのことにより住民票と選挙権を剥奪されることに怒った彼らとその支援者たちが立ち上がり、カメラを通じて闘う熱気があふれだす!

<11月11日(日)>在日(高祐二)、近現代史(未定)、12月9日(日)、未定、2019年3月、在日(樋口大祐) ※発表希望者は、飛田または水野にご連絡ください。

【月報の巻頭エッセイの予定】10月号以降の原稿です。締め切りは20日です。西村寿美子、玄善允、堀内稔、足立龍枝、石川亮太、鈴木常勝、坂本悠一、梶居佳広、高野昭雄、李裕淑、砂上昌一、藤川正夫、張允植、松下佳弘、三宅洋介、金早雪、高希麗、伊地知紀子、川那辺康一、廣瀬陽一、高正子、斎藤正樹、土井浩嗣、上田文夫、中川慎二、塚崎昌之、宇野田尚哉、姜健榮、佐野通夫、三宅美千代、全淑美、太田修、藤永壮、水野直樹、河かおる、本岡拓哉、梁千賀子、山根俊郎、川瀬俊治、小野容照、樋口大祐、梶居佳広、高木伸夫、長志珠絵、藤井幸之助、黒川伊織、吉川絢子、李月順子、高祐二、李景珉、青野正明、呉仁済、勝村誠、松田利彦、飛田雄一(思いつくままにリストアップしました。前倒しで原稿を書いてくださってもOKです。)

【編集後記】

■ほんとに暑い夏に、台風もよくやってきます。ほんとに異常気象です。みなさんいかがお過ごしでしょうか。遅れていました2018年度の青丘文庫研究会会員証を本号に同封して送ります。(昨年、封筒からピックアップせずに捨ててしまった会員が2名いました。ご注意ください。)会員は、購読料3000円を支払った方です。例外的に学生でメールニュースのみでOKの方には申し出により発行しています。在日研究会は更に会費5000円/年です。雑誌2冊が入手できますので元はとれます。ぜひ会員になってください。飛田